特集

いばらきの価値創造 第2ステージ

第2回　ネクスト10：いばらき圏域の10年後を見据えて

編集担当　梶山 健一、荒澤 俊彦

常陽アークでは、前号（2017年7月号）で中間総括した通り、2014年度から16年度までの3年間、「いばらきの価値創造～潜在力、デザイン力、連携力を活かして」をテーマに自主調査を行ってきました。

茨城とその周辺の関係の深い地域（いばらき圏域）（※）が抱える様々な課題の解決や新たな展開の可能性について、統計データや独自のアンケート調査、及び県外事例などをもとに、“未来のいばらき圏に向けて「新しい価値を創る」には”、という視点で“基盤”となる調査を行ってきました。

次は、“実践”の段階です。

アークでは、2019年までの2年間を「いばらきの価値創造　第2ステージ」と位置付け、今後10年間に実現可能な、新たな価値を創造する事業（試み）についての調査と提案を行っていくこととします。これに併せて調査も、より多くの実践者の皆さまに参加いただける内容に向けて、ステップアップを図っていくつもりです。

そこで、アークでは、県内で日々新しい取組みを実践する皆さまと10年後の未来を考える「ネクスト10座談会」を開催し、また多くの実践者の皆さま方からのご意見をうかがう中で、今後の調査テーマに対する衆知を集めました。本特集では、そのご紹介と、今後の調査の取り組みの基本的な考え方を示しました。

各地域での新たな価値創造を実践に繋げるにはどうすべきか。これまで以上に、皆さまとともに探ってまいります。

（※）いばらき圏域：茨城県及び影響（ヒト、モノ、カネ、情報等）が及ぶ栃木、千葉、埼玉、福島、群馬などの周辺地域

本特集の概要

これまで　**いばらきの価値創造 第1ステージ～潜在力、デザイン力、連携力を活かして（2014～16年度）**

⇒「いばらき圏内にある潜在力、デザイン力、連携力を活かして」をサブテーマに、圏域内の3つの力（潜在力、デザイン力、連携力）を切り口として、いばらきの価値創造（＝希望ある将来のいばらき像に向けた新たな展開の模索）について調査してきた。

これから　**いばらきの価値創造 第2ステージ～いばらき圏域の10年後を見据えて(2017～19年度)**

⇒今までの調査の基本を踏襲しつつ、「各地域でどういった価値が生まれたらよいのか」という視点から、いばらき圏域内での各主体による新たな価値創造の‘実践’に役立つ調査（＝実践型調査）を目指し、調査のステップアップを図る。

≪第2ステージの基本的な考え方～実践・提案に向けた調査≫

■地域が創造すべき新たな価値
- ○持続可能性を持つ価値
- ○構造的な環境変化に対応できる価値
- ○歴史的ストーリーを踏まえた価値
- ○未来を出発点とし、現在の延長線上にはない価値

■新たな価値創造のプロセス（方向性）
- ○多様な価値を圏域内に数多く創造する
- ○圏域全体でいばらきの“C”（※）を磨く

■今後の調査で意識する方向性
- ○開かれた調査＝参加型調査の設計
- ○実践に役立つ具体的な施策の提案・提言
- ○価値の可視化を通じた効果的な情報発信
- ○デザイン力を駆使した地域の取り組みを重視

↑

●実践力強化に向けたプラットフォームの提供

（※）“C”＝ contrast（<両極端を>対比する）、communicate（伝える）、connect（つなげる）、create（創造する）、coordinate（まとめる、調和させる）など

1．はじめに

1．調査テーマの設定　～なぜ「第2ステージ」「10年後を見据えて」なのか

「いばらきの価値創造」第１ステージでは、希望ある将来の地域像を描き実現していくためには、課題解決の視点だけでなく、新たな展開を模索する「価値創造」の視点が必要と考え、サブテーマ「いばらき圏内にある潜在力、デザイン力、連携力を活かして」で示した３つの力を切り口に、調査を行った。

第２ステージでは、今までの調査の基本を踏襲しつつ、「この地域にどのような新たな価値が創出されればいいのか」という視点から、いばらき圏域内での各主体による新たな価値の創造の実践に役立つ調査（＝実践型調査）を目指しステップアップを図ることとする。

なお、創造すべき新たな価値とは「今、ここ、私だけ」にとっての即時的な価値ではない。例えばこの地に20年、30年と根づいていくような我らの子ども達につなげられる持続可能な価値（いわば、いばらき圏域のSDGs（サステナブル・ディベロップメント・ゴールズ：持続可能な開発目標）（※））も目指すべき一つの価値であろう。

そのため、第２ステージのサブテーマである「10年後を見据えて」には、今後10年を目標期間とし、地域が将来のために新たな価値創造の実践を進めるべき、との意味が込められている。

（※）地球環境と人々の暮らしを持続的なものとするため、すべての国連加盟国が2030年までに取り組む17分野の目標。2015年９月の「国連持続可能な開発サミット」で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の中で合意された。

2．「ネクスト10座談会」の開催

常陽アークでは、今後10年間で実現可能な新たな価値創造の調査に関するヒントをいただくため、県内で様々な新しい取り組みを実践する皆様方による次の10年を展望するための座談会を開催した。

座談会の出席者は、地域の各分野を代表する以下の５名の方にお願いした（順不同）。

＜学識経験者＞県内デザイン分野で著名な筑波大学芸術専門学群ビジュアルデザイン領域准教授の原忠信氏

＜産業界＞ライフスタイルの総合商社である関彰商事㈱代表取締役社長の関正樹氏

＜行政＞茨城のイメージアップ請負人として県の情報発信に活躍する茨城県広報監の取出新吾氏

＜産業団体＞県内のものづくり企業支援の第一人者であるひたちなか商工会議所企業支援部部長の小泉力夫氏

＜民間団体＞市民活動の相談対応や講座開催、イベントの企画・運営等を手掛ける認定NPO法人茨城NPOセンター・コモンズ事務局長の大野覚氏

座談会では、原准教授をモデレーターとして活発な議論が展開され、これからのいばらき圏域に期待される価値創造の方向性に対する、複数の有益なキーワードが提示された。

また、「座談会を振り返って」では、原准教授と、建築・都市デザインや地域ブランディングの専門家である茨城大学工学部都市システム工学科助教の一ノ瀬彩氏の対談という形で、次の10年に向けた調査を進める上でのヒントを頂いた。

さらに、常陽アークの運営に関わる多くの皆様方からは、アンケートを通じて、これまでの調査に対する評価と、今後の調査の方向性に関するアドバイスを頂いた。

3．今後の調査で意識する方向性

「いばらきの価値創造　第１ステージ中間総括」(2017年７月号)でまとめた環境変化と今後の調査の視点に、本号で試みた座談会とアンケートからの視

点を加えることで、「いばらきの価値創造」第２ステージとして、今後のいばらき圏域の10年後を見据えた実践型調査の方向性や採るべき手法等について整理した。

【図表１　いばらきの価値創造～ステージ1からステージ2へ】

○2014年8月調査開始時点の地域を取り巻く環境等の変化

地域を取り巻く環境変化

・成熟経済（成長神話の崩壊）
・本格的な人口減少社会の到来・高齢化
・グローバリーゼーションの加速
・情報インフラの発展
・東日本大震災の発生
・環境・エネルギー問題の深刻化
・社会インフラの老朽化　等

地域住民の期待

・精神的豊かさの追求
・老後に対する保障
・地域医療
・福祉サービスの充実
・利便性の高い「まち」
・安全・安心な「まち」（防災・減災）
・子育て環境の充実
・安定した雇用
・食の安全
・交通機関の充実・公共施設の維持管理　等

地域社会・産業基盤の変化→地域課題の顕在化

＜社会基盤＞
・価値の多様化→消費行動・需要の変化
・中心市街地の空洞化、過疎地拡大・限界集落の顕在化
・地域間格差の拡大、市町村広域合併
・交通体系の充実と交流基盤の拡大

＜産業基盤＞
・大手企業の再編・統合→大手企業と地域企業の関係変化
・情報産業・サービス産業拡大→物流、商流、ビジネスプロセスの変化
・企業の雇用戦略の変化（非正規雇用の増加など）
・新エネルギー産業の視野拡大
・伝統産業の衰退
・農業の担い手不足と農業基盤の弱体化

切り口：「潜在力」、「デザイン力」、「連携力」を活かした価値創造

○第1ステージで実施した調査（調査分野）

産業調査	社会調査	地域調査
健康・医療産業、外国人雇用、女性起業、日立・ひたちなか地域の中小企業、消費調査（シニア・子育て世帯、未婚者）、新技術（AI、ロボット、IoT）、生活行動圏速報	認知症対策、スポーツ祭典、公共交通、空き家対策、出産・子育て	特区制度、県北臨海地域、県北山間地域、県央地域、鹿行地域、県西地域、古河地域、県南地域TX沿線、県南地域常磐線沿線

【調査結果から得られたこと】
1. 潜在力～いばらき圏域で未使用となっている様々な地域資源に着目。県内の潜在力の大きさについて改めて確認。
2. デザイン力～地域の未来をデザインし、そのために必要な資源や人材を集めるなどのアプローチや、圏域内外の専門家活用が必要。
3. 連携力～圏域内での連携の広がりや新たな連携の動き。課題は、連携力の質（中核となる主体の求心力、目標の共有、目標達成に必要な資源と人材の確保）。

○2017年7月中間総括

［加速する環境の変化］
(1)更なる人口減少・高齢化社会の進展
(2)外部との交流の一層の拡大
(3)情報やビジネスの変化の流れが加速

［これからの地方創生を考える上での視点］
(1)人口減少に対応した地域経営
(2)ヒトが貴重な時代への対応
(3)希望を創り出す地域（まち）へ

●有識者による座談会
●読者へのアンケート

第2ステージの調査テーマ：ネクスト10
→いばらきの価値創造の実践・提案を意識した調査

2. ネクスト10 座談会「いばらきの価値創造
～ 第2ステージ　ネクスト10：いばらき圏域の10年後を見据えて」

第２ステージでの調査の方向性を探るため、2017年５月、県内有識者による座談会を開催した。

座談会のテーマは以下の点である。

1）いばらきの理想の未来（100年後のいばらきの未来）について
2）いばらきの“これからの10年”について
3）常陽アークのこれからの調査に期待すること

参加者は、以下の方々である。（敬称略）

〈モデレーター・司会〉
原　忠信
筑波大学芸術専門学群
ビジュアルデザイン領域
准教授

関　正樹
関彰商事株式会社
代表取締役社長

取出　新吾
茨城県広報監

小泉　力夫
ひたちなか商工会議所
企業支援部
部長

大野　覚
認定NPO法人
茨城NPOセンター・
コモンズ
事務局長

1．座談会発言要旨

原　本日の座談会では、いばらきの10年後を考える前段として、さらにその先の「100年後のいばらきの未来」のイメージについて、議論いただきたいと思います。100年後を想像することで、現在の延長上ではない理想の未来についてのご意見を頂きたいと考えています。

そのうえで、100年後のいばらきの未来に近づくために、成長する過程であるこの10年がどうあるべきかについて、活発な議論をお願いします。

■いばらきの理想の未来を考える

新しいスローな価値を世界に発信する拠点へ

小泉　100年後に、いばらきが世界へ向けて新しい発信拠点となるポテンシャルは十分あると思っています。未来は人間が考えたところまでしか行き着かない。一方で、こうなりたいと思えば、必ずそこに向かって意識も行動も変わっていくので、そういう意味では未来を想像することはとても大切だと思います。

私にとって震災は「どうしてこんなに急いでいたのだろう」とか、「どうしてこんなに人と比べていたのだろう」ということを振り返るきっかけとなりました。これからは、社会全体がそういうスローな価値観へ転換する、その最先端がいばらきであってほしい。その価値観を求めて世界中からいばらきに行ってみたい、住んでみたいと人が集う「目指せ！幸せ共和国いばらき」と呼ばれるような理想郷になったらいいなと思っています。

多彩なコミュニティの誕生を楽しめる街へ

取出　志が高く、地域貢献をしたいという人は、世の中には少なからずいます。しかし、そうじゃない人の方が大多数ではないでしょうか。

みんなで地元のためにという意味では、昔だったら町内会や商工会に住民や商業者をつなぐ機能が強かったのですが、その機能がだんだん弱くなり、みんなもそれを求めなくなっています。震災で一回揺り戻しがあって、「コミュニティって必要だよね」という風潮になったけど、「でも、堅苦しい集まりは嫌だよね」みたいな考えは残っています。

そういう意味で、これからのいばらきでは、地域でのコミュニケーションをどうやって活性化するかということが重要だと思いますね。サークル活動とか飲み会とか何でもいいのですが、人との出会いが増え、友達が増えることでまちが徐々に活性化していきます。ただ、集う人が楽しめないと、活性化も結局は継続できません。ですから、私は、いばらきのそれぞれのまちが、多彩なコミュニティの誕生を楽しめるまちであってほしいなと思っています。

いくつもの大切な場所を楽しめる「スライドライフ」（二地域居住）ができる地域

関　「茨城県の人口を増やそう」という話をすると、みんな「そうですね」と言います。しかし、隣の県でも同じことを言っていることを考えると、現在の状況は自治体間の人の奪い合いなのかもしれません。

このため、私は、これからのいばらきでは「スライドライフ（slide life）」、二地域居住のような考え方が、もっと現実化していくのではないか、と考えています。

例えば、「研究学園都市のつくばでは、日本中の退官する大学教授の蔵書を預かりましょう」という

ような施策を考えてみてください。教授の家族にはただのゴミに過ぎない蔵書も、教授本人にとっては宝物です。廃校などに蔵書の保管場所を作れば、退官した教授は、蔵書は自分の子どもみたいなものだから、必ずつくばに戻ってくるでしょう。そうして、退官した教授たちが集うコミュニティが出来上がってきます。

つまり、「スライドライフ」というのは、自宅があるまち、勤務先があるまち、趣味を楽しむまち、それぞれにそのまちで暮らす良さがあるので、まちとまちをslideしながら、生活を送っていくことです。単身赴任で行き来するのではなく、二地域居住、三地域居住のイメージです。そうすると、3,000万円で一つのマンションを買うのではなく、違う場所に1,500万円で２つ買うこともありうるでしょう。こうした動きが地域で起こってくる可能性は十分にあると思っています。

自発的な行動が支えるボランタリーな社会へ

大野　震災や常総の災害時には個人の自発性がすごくクローズアップされました。災害の現場ではルールは何もないので、どんどん自発的に提案し、自ら動き出すことが大事になるのです。

NPOの現場では、企業の社員研修、初任者研修として、ボランティアに受け入れたりするのですが、それはまさに、環境やルールが根本的に変わっていくこれからの時代に、自発性こそが生きるという事を企業の皆さんもわかっているからだと思うのです。

業務命令で全て動くという話ではなくて、どんどん自分で課題を見つけて解決に取り組んでいくボランタリー（自発的）な社会に向かうのではないでしょうか。

チャレンジできる風土

取出　携帯ゲーム会社のDeNA会長の南場智子さんの講演を聞いて感激したときがあります。

かつてのDeNAは、各チームの事業計画を経営陣が判断していました。でも、年齢層が高い経営陣では、ヘビーユーザーである10代、20代の若い人の感覚がわからないですから、判断をこまねいているうちに、他社に先を越されるケースも多かったようです。

そこで、「一定の開発費の範囲内であれば、各開発チームの判断で、新作のゲームソフトを市場にリリースして可」というシステムに変えました。商品化した後には、ユーザーの増加や課金の発生具合といった数字が出てくるので、それらの市場の反応から、その新しいゲームにどれだけ追加投資するかを経営陣が判断するそうです。現場に任せることと、経営判断とがうまくミックスできた訳です。

欧米では、現場に行くマネジメントをマネジメント・バイ・ウォーキングアラウンド（動きまわるマネジメント）と呼んでいます。現場の話をちゃんと聞いてあげたり、現場を見て意思決定したりするマネジメントは、現場に行かないマネジメントと比べて、意思決定の信頼度が格段に違うはずです。

原　皆さんの議論が、将来のいばらきや100年後の未来の世界にどうつながってくるかと考えてみたのですが、現場で判断し考えることで培われる自発性や解決力が、次の時代のリーダーシップにつながってくる。自発的にチャレンジできる組織でないと、未来に生きていけないのではないかという気がしますね。

未来を共有するサステナブルな実践力

大野　未来の話をする時に、持続可能性（サステナビリティ）という言葉がよく取り上げられます。

その要件は経済のほかに、社会と環境があって、その３つが揃って初めてサステナビリティが生まれるのです。

だから、企業誘致も大事なのだけれども、経済的なメリットだけでなく、環境への負荷軽減に対して何ができるのか、地域社会・地域住民に対しての福祉的な観点からどう影響を与えるのかといった視点からも考える必要があると思います。

それを一企業だけに問うのは難しいのですが、

様々な企業や組織が連携することで、少しずつ解決できるのだと思います。

関　私は若い頃から県などの様々な会議に参加させてもらっていますが、この10年の間に会議で決まったことは絶対に実践しようと強く思うようになりました。何年か続けていれば、その間に決まったことを実践できるはずと考え、今それを徹底しています。

世界への郷土愛の発信

大野　100年前はフェイスブックの登場など思いもよらなかっただろうし、物理的に顔を合わせられるコミュニティの範囲も、昔と今では全然違うと思います。

また、これからの100年を考えるキーワードとして、グローバルとローカルを合わせた「グローカル」という造語があります。この言葉が使われる際には、グローバルのほうが強調されている気がしますが、ローカルの深化も重要です。

取出　グローカル的に考えると、アジアの人たちは日本人よりアグレッシブで、自分の国やまちをとにかく自慢してきます。例えば、同僚の車に乗せてもらうと、ホテルに連れていってもらう間に、まちの歴史や観光案内をこれでもかというくらい言ってくるじゃないですか。

茨城県民だけではなく、日本人は相対的にそういうことをあまりやらないですよね。ですが、郷土愛も内に秘めているだけでは外には伝わりません。もしそのような想いがあれば、もっと外に出していくほうがいい、と私は思います。

若い力が開くコミュニケーションの扉

取出　私たちが子どもの時代は、多くの人の前で発表する機会なんて、ほとんどありませんでした。大学生になっても、卒業論文の発表ぐらいだったでしょう。それに比べ、今の子どもたちはより多くの発表の機会を与えられて訓練されていますから、私たちよりもプレゼンテーションが上手です。

静岡県島田市では、県立島田商業高校の生徒が日本初の「高校生フューチャーセンター」をつくって、地域の課題解決に協力しています。

島田商業の生徒たちがファシリテーターとしてワークショップに地域の大人たちを誘い、高校生と大人が地域課題の検討や課題解決に取り組まれています。大人同士の会議ではなかなか腹を割って話せないものですが、高校生が接着剤になって大人同士につながりが生まれてきています。

私はこの試みにすごく感銘を受けたので、これを静岡からいばらきへ何とか“輸出“したいと思っていたところ、竜ヶ崎第二高等学校では島田商業や静岡県立大学の協力を得て、６月にフューチャーセッションを開催され、茨城県内初となる高校生フューチャーセンターの開設を秋に行おうと準備されています。

行政が学生だけに事業を考えさせたり、アイディアをもらったりしても、うまく結果が出せないケースが多いのではないでしょうか。高校生フューチャーセンターの場合、大人と子どもが一緒に地域の未来を考えています。また、大人はそこで子どもたちに約束したことを実行します。それに、子どもたちが地域の大人たちと直接対話するだけでも素晴らしいじゃないですか。

原　いままでのお話から、「こうなったらいいよね」みたいな話がいくつか考えられそうですね。例えば、今までは同じ業界なのにすごくクローズドな状態だったけれども、女子高生がファシリテートすることによってオープンな形になるとか、比較的年齢の高い人が集まって話し合う場所に、もっと若い世代が入ってくるといったことです。

寛容さへのこだわり（多様性の価値）

大野　多様性（ダイバーシティ）も大切なコンセ

プトの一つです。特にまちづくりで、「よそ者・若者・ばか者」と言われる人は、突拍子もないことを言ったり、新たなことを起こしたりする人たちですが、そのような人たちが、自由にものが言える環境にするのが必要だと思います。

そもそも上の世代の方が思っている以上に、今の地域社会は多様性に満ちています。茨城県内では県西地域、特に私が仕事で関わっている常総地域の小学校では、30人強のクラスのうち５～６人は外国人の子どもです。農業をやっているのも、コンビニの弁当をつくっているのも、実際は外国人の方がかなり多い。そういう現実が、なかなか理解されていません。

よそから来た人が突拍子もないことを言い出しても、それを受け入れる土壌がある自治体と、定例業務だけさせて何のイノベーションも起こらない自治体との差が、実際に出てきています。そういう意味では、受け入れる土壌を整備することはすごく大事だなと思っています。

原　そうした人たちをテコにして、地域をプラスに変えていくようなことが、地域によっては十分には出来ていないですね。多様性の中から、新しいことが創発されて価値が生まれてくることは相当あると思いますし、その辺にこれからのいばらきの可能性がありそうですね。

小泉　岡山県の山間部の限界集落に近いところに真庭というまちがあるのですが、そこの地域おこし協力隊は韓国人の方です。その方は、シェアハウスで一緒に働く仲間を集めるのに、ヨーロッパ人やアメリカ人などの長期滞在者を集めて面接を実施しました。彼らに対し、ダイレクトに「地域のために何かできるのか」を問いかけたところ、「私はコンピュータでその地域のマップづくりをやる」とか、「自分はエンジニアだからこんなことができる」など、自らが貢献できる仕事や役割を具体的に答えてくれたそうです。

この例から考えると、グローバル人材とローカルにどう付き合うかというのが、これから大事になってくると思います。

■これから10年のいばらきを考える

原　100年後のいばらきという視点から皆さんにお話をしていただいて、ここまで「幸せ」、「コミュニケーション」、「グローカル」といったキーワードが出てきました。また、いばらきの郷土愛を促すためにもっと出来ることがあるのではないかという話もありました。

ここからは、今後10年、あるいはもうちょっと近いところで、茨城県として未来はこんなことができるのではないかという具体的なアイディアやその方法について、ご意見をお願いします。

ひとつのものに特化した戦略

小泉　エコノミストの大前研一さんが、ある本の中で「いばらきって、一番の食材がたくさんあるよね。でも食材だけでは魅力も付加価値も生まないので、超一流のシェフを集めて、そこで最高のものを提供するところとして、一点突破したらいいのではないか」と書いていました。

その参考として、人口約16万人のスペインのサンセバスチャン地方を挙げています。サンセバスチャンは、海沿いの美食の町として知られ、「最高の食を提供する」というコンセプトだけで、世界中の富裕層が夏のバケーションに押し掛けます。

いばらきも食という「幸せ」を求めて世界中から集まるという仕掛けを一点突破で全面展開したらどうでしょうか。10年間集中して続けることが出来れば、いばらきの持っているポテンシャルが活かされると思います。情報の発信方法を少し工夫して、グローバルなマーケットへの発信にフォーカスすると面白いかなと思います。

両極端の価値を認める

関　茨城県は、大きく分けて東西南北と中央の５つ

の地域があって、例えば病院はそれぞれの地域につくらなければいけないとか、そういう変な公平さがあるとともに、一本の軸があって、それをずらしてはいけないということがあったと思います。私自身は、不公平さがあったり、複数の軸があったりしてもいいと思っています。

これからITやSNSなどの世界を考える人たちは、「それらを使いこなす人のために何ができるか」、「それができない人のために何ができるか」、という２つの側面から常に考えていかなくてはいけないのではないでしょうか。言い換えると、「全く真逆の価値を常に考えていく」ことが大切だと思っています。

大野　障がい者福祉の分野でも、公平性が問題になっています。例えば、すべての人に平等に同じ福祉サービスを提供することは、必ずしも公平ではありません。障がい者には、「障害者権利条約」などに基づいた合理的配慮が必要で、例えば障がい者がアクセスしにくい施設の場合、それを改善することが、平等なサービスなのです。

また、今、オリンピックに向けて障害者スポーツがだんだん盛り上がってきています。それを応援することは、一つのマーケット、新たな経済が生まれることにつながります。ですから、多様性を受け入れると、新たな力が生まれるという発想を持つべきなのではないかと思うのです。

例えば、常総地域では、多くのブラジル人が働いているのですから、横浜の中華街のように「ブラジル街」を目指したらどうでしょうか。小籠包を食べるためだけに、わざわざ横浜まで行っている人がたくさんいます。同じような発想で、常総に来たら、美味しいブラジル料理であるシュラスコ※が食べられる場所にする。そうやって新たなマーケットをつくるということも面白いと思います。

※シュラスコ：鉄串に牛肉・豚肉・鶏肉を刺し通し、荒塩をふって炭火で焼くブラジルの肉料理

選択肢の多様性を進めた無印良品の地域

取出　守谷市に国際交流員として、ドイツから派遣されてきていた職員が言っていた話ですが、ドイツ統一前の旧東ドイツでは、女性の就業率は97％程度であったそうです。当時の東ドイツでは、子どもは家で育てるのではなくて、社会で育てるのが当たり前で、母親は外で働くのが普通でした。

統一後は就業率が下がって、文化が変わってしまったようですが、旧東ドイツのように社会で子どもを育てるという意識、あるいは家事労働の削減という社会的な動きがないと、女性は社会に進出しにくいのではないでしょうか。

小泉　夫婦いっしょに子育てをする、奥さんだけで子育てをするなど、子育てに対する夫婦の役割は家族によって様々で、どれが正しくてどれが間違っているという訳ではないと思います。きっと、選択肢があることが幸せにつながるのでしょうね。

そういう意味で、いばらきにはいろいろな選択肢の可能性がありそうな気がします。

取出　過疎化が進んできてしまっている地域などは、やはり選択肢が少ないと思いますが、これからはインターネットの活用で変わってくる部分が増えるかもしれません。これまでは山奥の一軒家では十分なサービスが受けられなかったかもしれませんが、ネットを使って海外の人とも話せるといったような選択肢が増えてきましたよね。

小泉　私たちは、無意識のうちに「ブランド化」とすぐ言うじゃないですか。ところが、多くの人はブランド化とは何なのか、わかっているようで実はわかっていないように思います。

有名ブランドの松阪牛で知られる松坂市の人た

ちは、他のブランドがない地域の人たちより幸せなのでしょうか。もしかしたら、いばらきの良さは、無印良品じゃないけれども、無印良県とか、ブランドがない良さにあるのかもしれません。

原　地域に価値ある事業や、人をつなぐデザインや仕組みが、これからは本当に大事になってきます。先ほどのコミュニケーションやコミュニティの話もそこにつながってきます。

今日の議論から、いばらきが閉じられたコミュニティではなくて、多様性に寛容で、開かれたコミュニティになっていったらいいのではないかと感じました。そうしたコミュニティには、よそ者を受け入れる土壌があり、選択肢があります。

地域の魅力を子どもたちが発見していけるようにするための具体的なアイディアや、教授の蔵書は家族にとってはゴミだけど、教授にとっては宝だといった話もありました。そういうものを共有していくような仕組みやあり方について、もっと考えていくべきでしょう。そこでは、いばらきならではの切り口が求められると思います。

■常陽アークのこれからの調査について

原　最後に、今後10年の常陽アークにどんな調査を期待しますか。

市民生活の視点からの課題の可視化と発信力

大野　いばらきの価値創造というテーマを掲げるにあたって、誰にとっての価値なのかを改めて確認する必要があると思います。いばらきは今まで発信力が弱かったので、魅力度ランキングの向上やブランド化に取り組むべきなのですが、先ほどから地域愛とか郷土愛ということが出ているように、外から見た評価ではなくて、茨城県民がいばらきという地域にもっと関心を持って何かやりたいと思うことが本当は大切だと思います。

私が代表を務めるNPO法人「フードバンク茨城」では、企業や市民から、規格外、包装ミスなどの理由で廃棄されてしまう食品（食品ロス）を頂いて、それを食に困っている方々に提供しています。その時、必ず話題になるのは、子どもの貧困です。

県内で生活困窮と言われている子どもたちの数は、実に３万5,000人と言われています。３万5,000人というと、私が住んでいる守谷市の人口の半分以上の数です。それと同数の県内の子どもたちが、生活困窮世帯、いわゆる年間122万円の所得以下の世帯で暮らしています。この３万5,000人という数字をほとんどの人が知りません。

そうした状況に対し、市民が何か自分のできることがあるのではないかと考え、アクションを起こすことが、結果的に「住みやすいいばらき」につながり、郷土愛にもつながるはずです。

ですから、常陽アークには、市民生活の視点から見た課題や、市民が関心を持ちそうな課題をクローズアップし可視化させ、それによって関係者の人が広く情報発信するきっかけになるような調査を期待します。

原　私は、これまでの皆さんの意見から、10年後のいばらきの未来像とは、普段使っている定食屋の定食のように毎日食べたい存在であり続けること、そしてそれがいばらきの幸せな姿ではないかと感じました。

ニュージーランドは人よりもヒツジのほうが多い国です。そんなゆったりとしたニュージーランドに、自然でシンプルなライフスタイルを望む人達が世界中から集まってきます。人口が減少することで、逆に新たな幸せのかたちが見つかっていくということもきっとあるはずです。

本日は、長時間にわたり、活発な議論を展開していただき、本当にありがとうございました。

2．座談会を振り返って（有識者対談）

座談会を終えて、モデレーターであった筑波大学の原准教授に、今回の座談会について改めて振り返っていただいた。なお、パートナーとして、県内外の建築・都市デザインや地域ブランディングに携わる茨城大学の一ノ瀬彩助教にも加わっていただいた。

魅力の焦点の当て方と発信するキーワード

－原先生と一ノ瀬先生は、座談会を振り返って、どのような印象をお持ちになりましたか？

原　今回の座談会では、100年後、10年後のいばらきの未来の姿についての議論を試みました。私自身は、皆さんのお話から、いばらきには多様な価値が内包されていて、そうした多様性に大きな魅力があるということを改めて感じました。

一ノ瀬さんには、座談会の会議録に目を通していただきました。これを踏まえ、いばらきの未来についてどうお考えですか。

一ノ瀬　座談会では、「グローカル」というキーワードが取り上げられていましたが、いばらきの各市町村や各主体と海外とが直接つながるケースは今後増えそうですね。それぞれが魅力ある価値を生み出していく、そんな未来が描けるのではないでしょうか。その意味では、いばらきの各主体がまちの何に焦点を当て、どんな軸をたてて発信していくかが、これからのいばらきにとって重要だと思います。

私がまちづくりイベント「工芸の五月」に長年参加している長野県松本市では、「工芸・クラフト」にフォーカスしたまちづくりを進めてきた結果、この10年で民間事業者、業界団体、行政、文化施設、大学、市民団体、町内会、作家、一般市民に至るそれぞれのレベルで、クラフトを介してまちの暮らしを楽しみ・発信する仕組みやエリアが形成されつつあります。それによって、様々な試みの継続性とまちへの定着がみられます。

原　私がかつて住んでいた米国ロードアイランド州は、400マイル以上の海岸線を持つことから「海洋州（The Ocean State）」と呼ばれます。米国では各州に愛称があって、それがレジャー的なアクティビティや農業などの産業と上手くつながっている印象ですね。いばらきについても、何かにフォーカスしたキーワードがあれば、圏域としての統一感がもう少し出てくるような気がします。

米国ロードアイランドの美しい海岸線
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Newport,_Rhode_Island_Aerial_View.jpg

各地域のライフスタイルの魅力づけと見える化

－いばらきには、圏域の中で少し場所を変えると日常性と非日常性の両方を味わえる魅力があると思います。そうした地域の魅力の「見える化」が、今後のいばらきの大きな課題でしょうか。

一ノ瀬　各地域のライフスタイルの魅力が、はっきりと見えるようになってくると良いでしょうね。また、いばらき圏域全体としても、各地の多様性を包括して魅力を伝える方法、地域のデザイン力・編集力・コミュニケーション力が問われていくように思います。

原　確かに、各市町村がそれぞれの“旗”をしっかり立てるとともに、茨城県として全体を包摂する

“旗”を立てることは必要でしょう。例えば常陸風土記にある「常世の国（桃源郷の意）」のように。

デザイン力の観点から言えば、地域を魅せるための良いイメージづけが、これからのいばらきを占う一つの鍵となるでしょう。地域の魅力、あるいは地域への愛着といった、いばらきの価値をストックしていく。 いばらきは、10年後を目指してそうしたストックを増やすことを続けていく必要があると思います。

また、そうしたブランディングの発想に基づく個々の試みが、例えば「つくばブランド」のように、地域全体のブランド力につながっていくといいですね。

両極端が生み出す共通の軸

－座談会で、「両極端を認める価値」という視点は、興味深いと思いました。

原　確かに、いばらきには、都市⇔田舎、ボリュームゾーン⇔ニッチゾーン、伝統⇔最先端、といった両極端の価値が共存している特徴があります。

ブランディングの視点で言えば、両極端のエッジをそれぞれ立てることが基本です。その上で、その両極が重なり合う部分に共通の軸を見出せるのであれば、10年後を目指してその軸を高く掲げ、一点突破を目指すこともできるでしょう。

一ノ瀬　私が大学の授業などでフィールドワークしている日立市は、景観的な視点でみると市の中心部に大きな街区の工場や研究所があり、海浜部には大きな港があり、海と山に挟まれたコントラストの強いまちです。同様に、水戸市やひたちなか市、つくば市なども、際立った個性を持つまちで、それに呼応したユニークなライフスタイルや現象がまちに蓄積している。こうした際立った個性が相互に関わりあい、デザインされることで美しいコントラストが立ち現れるまちになると思います。

まちの特徴的な機能と各資源との関連に注目

－コンビナートがある鹿嶋・神栖、研究機関が集積するつくばのような都市では、特化した機能の強化だけでなく、例えばコンビナートの夜景をPRするといったように、プラスαの新たな価値を打ち出していく必要もあると思います。

原　産業集積などの特色を、地域の魅力向上に活かさない手はありません。それと、産業と様々な資源が歴史的なストーリーで繋がっているかどうかに着目すると、面白い発見があります。日立で言えば、日立鉱山の大煙突をはじめ、工場労働者に馴染みの深い、安くて美味しい食堂や居酒屋、緑回復のため各地に植えられた桜など、様々な産業の歴史遺産がまちの多様性に結びついています。

一ノ瀬　漁業で知られる日立市久慈町では、まちの中に昔からのお菓子屋が目立ちます。一見、漁業の町とは関係ないように見えますが、実は、地元の漁師が、海での安全と大漁を願い、縁起担ぎとしてお菓子を漁に持っていったことに由来しているそうです。このように、一見関係ないようなモノやコトでも歴史的なストーリーを紐解き、それらを結びつけることで地域の魅力につながることは数多くあると思います。

「“C”ではじまるコレクション」

－最後に、座談会を踏まえ、これからのいばらきの10年を展望する包摂的なコンセプトやキーワードが考えられるでしょうか。

一ノ瀬　座談会で取り上げられた、あるいは連想されるキーワードの多くは、英語の“C”で始まりますね。contrast（＜両極端を＞対比する）、collect（集める）、communicate（伝える）、connect（つなげる）、create（創造する）、coordinate（まとめる、調和させる）…。

原　なるほど。では、これからのいばらきの方向性を束ねるキーワードとして、「“C”ではじまるコ

レクション」というのはどうでしょうか。

行政はわがまちの“C”を、企業はわが社の“C”を見つけていく。そうして、自らのアクションにつながる「C□□…」の□を埋めていく。

いばらきの各主体が、それぞれの“C”を磨いていくことが、いばらきの価値創造、つまりいばらきのネクスト10につながっていくと言えそうです。

―いばらきが、その多様性を見える化し、効果的に発信していく方法として、地域全体で“C”ではじまる様々な試みに取り組んでみたらどうでしょうか、ということですね。座談会を総括する貴重なご提案を示していただき、誠にありがとうございました。

読者（有識者）からの今後のアークに対する主な意見

常陽アークでは、「いばらきの価値創造ネクスト10」のテーマ設定に先立ち、複数の読者（有識者）に対し、調査で取り上げてほしいテーマや、期待する調査の内容について、ご意見を伺っている。ここでは、その一部を紹介する。

1．今後の調査で取り上げてほしいテーマ

今後の自主調査のテーマとして、有識者の興味や関心が高い項目の上位は、「ICT、AI、IoT、ロボット」や「グローバル化」、「働き手」など、15項目となっている（図表２）。

2．調査内容・構成についての要望

調査内容や構成に関する有識者の主な要望は、次の通りである。

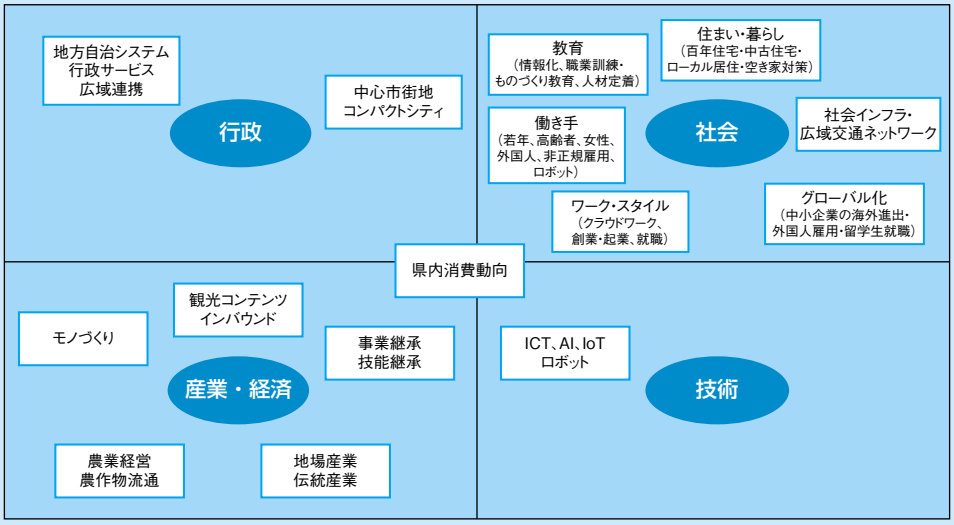
○調査テーマを明確にした上での課題の抽出、および財団としてより一層の施策の提案・提言。

○理念や概念などの枠組み自体が変化しているという仮説をスタートに、県内におけるその萌芽を丹念に探すことで、茨城の未来を考える概念的な調査。

○「ネットビジネス」や「AIで変わる茨城県」、「水素社会」など、技術革新に対応した新たな県内の動きの紹介。

○県内市町村のデータの特集号（全市町村の数字を比較、課題の抽出）。

【図表2　今後アークの調査で取り上げてほしいテーマ（有識者意見の上位）】



3．いばらきの価値創造　第2ステージに向けて

「はじめに」で掲げたように、常陽アークは、第２ステージにおける調査において、いばらき圏域内での各主体による新たな価値の創造の実践に役立つ調査（実践型調査）を目指していく。

ここでは、本特集のまとめとして、有識者による座談会などを通して得られた知見をもとに、今後のいばらき圏に求められる新たな価値や創出プロセスについて確認した上で、実践型調査に向けた今後の基本的な考え方を整理する。

１．ネクスト10：いばらき圏域のこれからの10年を見据えて

⑴ アークが考える、地域が創造すべき新たな「価値」

持続可能性を持つ価値

新しい価値を創造していくうえで重要な課題のひとつは、「その価値は30年、50年、もしくは、100年後も続いていくことが可能なのか」という持続可能性（サステナビリティ）である。求められているのは、いばらき圏域におけるSDGs（サステナブル・ディベロップメント・ゴールズ：持続可能な開発目標、13頁参照）への対応と考えても良いだろう。

全国各地でこれまで数多くの地域づくり、まちおこしの施策がとられてきた。しかし、成功事例や先進的取り組みでも、10年、20年後と続いているケースは、それほど多くはないのではないだろうか。

新たな価値創造とは、一時的に地域に観光客を呼び込むためだけのイベント、あるいは中長期的な販売戦略の発想を欠いた名産品の開発など、即時的・対症療法的な地域おこしとは本質的に異なる。

第２ステージでは、そうした観点から、地域で生まれた新たな価値について、それが持続可能性をもつ価値かどうかという視点から考えていきたい。

構造的な環境変化に対応できる価値

17年７月号の中間総括では、調査期間中にみられた経済社会の変化の中でも、いばらき圏域の未来に向けて顕著に現れている構造的な環境変化として、「人口減少・高齢化社会の進展」「外部との交流拡大」「情報やビジネス（物流や商流）の流れの変化）」の３つを示した（14頁、図表１参照）。

これらの構造的な環境変化は、今後数十年は加速こそすれ、終息していくことはないものと考えられる。したがって、これからの10年でのいばらき圏域における新たな価値創造では、これらの環境変化への具体的な適応力がより一層重要度を増すことになる。

第２ステージの調査では、これらの環境の変化に地域がどう適応しているかを考察すると同時に、調査を通じて、新たな歴史に耐えられるだけの許容性のある価値を発掘していきたいと考えている。

歴史的ストーリーを踏まえた価値

「座談会を振り返って」では、茨城大学の一ノ瀬助教から、これからの価値創造を考えるヒントとして、日立市久慈町における、漁業とお菓子屋との歴史的な深い関係についての指摘があった。

まちは歴史の賜物である。今は、一見関係がないように見えるモノやコトでも、歴史的なストーリーを紐解き、見える化し、それらを結びつけることで面白い発見があり、新しい価値創造へとつながる。

いばらき圏域の多様性は、豊かな自然や農産物だけではなく、製造業の集積など、産業面での特色も含まれる。第２ステージでは、これまでのアークの産業調査の蓄積を活かし、産業と様々な資源がどのような歴史的ストーリーで繋がっているかについても着目していきたい。新しい価値とは、積み重ねた過去が、新しい歴史へと通じる道の上に生まれる

ものである。

未来を出発点とし、現在の延長線上にはない価値

座談会では、モデレーターの原准教授の提案により、最初の議題を「100年後のいばらき」とした。有識者の方々に、100年後の様々な理想の姿を提示してもらったうえで、10年後、そして今何をなすべきかについて議論していただいた。こうした将来（未来）予測から今を考える思考法は「バックキャスト（backcast)」と呼ばれる。この手法により、未来を出発点に見出された価値は、現在の延長線上にはない様々な可能性から選択した新たな価値であると考えられる。

本号の論説では、茨城大学の佐川泰弘教授に「人口減社会を想像し、ローカル志向を生かした幸福追求を」というテーマで論考いただいた。佐川教授は、本論の中で「『人口減＝不幸の始まり』ではない。現在の社会システムに囚われず、10年後、20年後の日本と茨城を想像して、そこでどのような働き方、暮らし方をしていたいか、どういう状態が幸福か、それに至るにはどういう制約や不足、ニーズがあるかを個々がそれぞれの立場で考えてみることがまず必要である。」と説いている。佐川教授には、未来を出発点に新たな価値を創造することの意義をご指摘していただいたと考えている。

⑵ 新たな価値の創出プロセス（方向性）

多様な価値を圏域内に数多く創造する

いばらき圏域は、座談会出席者も指摘するように、多様性に満ちた地域である。しかしながら、これまでは、産業振興や観光の分野で新たな価値を創ろうとするときにも、「その価値をすべての地域の人々で共有しよう」、または「すべての地域の人が共感できる価値でなければ駄目だ」といった暗黙の力が働き、その多様性を活かせない、むしろ仇となるケースも多かったように思われる。

しかし、今後は、特定の地域、特定の人だけが共有し共感できる価値であっても、それが「ひとつのものに特化する＝一点突破する」ことで、圏域全体に新たな変化を生み出す可能性が大きいのではないだろうか。そうした多様な価値がいばらき圏内の各地域にいくつも花開いていく姿こそが、いばらきの理想の未来形だと考えられる。

圏域全体でいばらきの“C”を磨く

「座談会を振り返って」では、これからのいばらきの10年を展望する包摂的なキーワードとして、「“C”ではじまるコレクション」というコンセプトが提示された。

今回の座談会から想起される、contrast（＜両極端を＞対比する）、communicate（伝える）、connect（つなげる）、create（創造する）、coordinate（まとめる、調和させる）といったキーワードをcollectする（集める）ことは、いばらき圏域全体のブランドの向上に大きく寄与すると考えられる。

行政や企業などが、各自の取り組みについて、これらのキーワードと照らし合わせ、価値創造のプロセスを強固なものにしていくことは、圏域全体としての価値の磨きにつながっていくだろう。

2．第2ステージでの調査で意識する方向性

開かれた調査＝参加型調査の設計

アークでは、今回のテーマ設定に先立ち、幅広い関係者(有識者)に対して、今後の調査テーマや期待する調査内容について意見を伺った。その結果、今後の調査テーマとして興味や関心が高い項目の上位には、「ICT、AI、IOT、ロボット」や「グローバル化」、「働き手」などの15分野が挙げられた（24頁・図表２参照)。

第２ステージでは、これらのテーマを個別調査として取り上げることを想定している。その際、外部に広く意見を求める過程をこれまで以上に重視し、より開かれた調査＝参加型調査とすることで、実践につながる調査を目指していきたい。

調査範囲については、第１ステージと同様「いばらき圏」の考え方をさらに推し進め、茨城県を中心

としながらもより広域化した地域の将来の姿を考えていくこととしたい。

実践に役立つ具体的な施策の提案・提言

また、関係者からは、調査内容や構成に関する要望として、「いばらきの未来を考える概念的な調査」、「技術革新に対応した新たな動きの紹介」などとともに、「財団としてのより一層の施策の提案・提言」を求める意見が多くあった。

本件を踏まえアークとしては、今まで以上に地域の現場に足を運び実態を細かく観察することで、より実践に役立つ具体的な提案や提言を心がけていきたい。

価値の可視化を通じた効果的な情報発信

新たな価値を創造していくには、その関係者が共感できるように「見える化（可視化）」する試みが不可欠である。第２ステージでのアーク調査の最も重要な役割（ミッション）は、一見すると見えにくい各地域の新たな価値創造の動きを可視化し、情報発信していくことだと考えている。

座談会では、有識者から「市民生活の視点からの可視化と発信力を期待している」といった意見があった。

確かに、茨城県の場合、他の都道府県に比べ地域の魅力に関する発信力が弱いと指摘されることが多い。しかし、有識者の指摘にもあったように、重要なことは、外部の評価のためではなく、地域愛や郷土愛を促すために、茨城県民が「いばらき」という地域にもっと関心を持てるような価値の可視化と情報発信が進むことではないだろうか。

「愛の対義語が憎しみではなく無関心であるのなら、地域への関心こそが地元愛への入り口となる」。第２ステージでは、そうした考えに基づき、価値の可視化を通じた情報発信に努めていきたい。

デザイン力を駆使した地域の取り組みを重視

いばらき圏域は、同じ圏域の中でも、ほんの少し場所を変えるだけで、異質なものに出会える場所であり、日常性と非日常性の両方を味わえる魅力がある。

日常性と非日常性の両方を味わえる魅力、あるいは異質で多様なライフスタイルが共存できる魅力を可視化する際には、地域の魅力を高めるためのイメージづくりを実践することが必要であろう。そこでは、地域のデザイン力や編集力が問われることになる。

第２ステージでは、各地域でのデザイン力を駆使した取り組みの掘り起こしとともに、そうしたアプローチを促す試みにも取り組んでいきたい。ただし、地域の魅力づけにはデザインやブランディングなどの専門家の協力が必要である。そのため今後は、ソーシャルデザインなどデザイン領域分野の実践者・有識者等との関係を強化していきたい。

実践力強化に向けたプラットフォームの提供

地域の新たな価値創造には、そのクオリティを支えるデザイン力、その価値を発信するプロモーション力に加え、それを実践するための連携力が必要である。

第２ステージでは、アーク自らの連携力のレベルアップを図るべく、いばらき圏域の学識者を中心とした様々な分野の有識者とのネットワーク構築をより強化し、調査内容に反映させていくつもりである。

なお、アークでは、今後、新たな価値創造を実践するキーパーソンや組織に対して、本誌面を情報発信の場として提供していくことも考えている。今後提供していく実践力強化のためのプラットフォームに、多くの方に参加していただくことを期待するとともに、新たな価値創造の実践に役立つ方策を、参加される皆さまとも協力しながら探っていきたいと考えている。